

虚栗の風調

——ウカレビト浮狂人の俳諧——

浪 本 澤 一

一

『冬の日』は蕉風俳諧の濫觴である。そこに到達するまでの新風模索の胎動について、許六は『誹諧問答青根が峯』に、次のごとく記す。

去来曰、先師の次韻起りて、信徳が七百韻おとろふ。先師変風におけるも、みなし栗生じて、次韻かれ、冬の日いでゝみなし栗落^{おち}。

『冬の日』の風調を確かめるためには、蕉風への模索期ともいうべき『次韻』『虚栗』の風調にひとまず目を曝すのが順序であり、これらの俳諧との比較において、蕉風の濫觴としての『冬の日』の風調がひととき明らかになる。『虚栗』から『冬の日』への画期的な飛躍は浮狂^{ウカレ}の俳諧から風狂の俳諧への質的な変革である。本稿においては『冬の日』の前駆的な俳諧集である『虚栗』を取り上げ、その風調について私見を述べることとする。

二

『虚栗』は、天和三（一六八三）年刊、其角編の俳諧撰集で、四季の発句四一八句、歌仙九卷を主な内容とする。延宝末年から天和年間へかけての新風模索の機運の中から、連句の様式も百韻から歌仙へ移っていく傾向が目立ってきた。延宝九年刊、言水編『東日記』の連句九卷はすべて歌仙であり、天和二年刊、千春編『武蔵曲』は連句三卷のうち一巻が百韻で他の二巻は歌仙である。『虚栗』は、連句九卷すべて歌仙を採用しており、様式上の新傾向として注目される。作者群は、新風への旗幟を次第に鮮明にしてきた蕉門の俳諧者を中心に、蕉門に心を寄せる貞門・談林系の俳諧者との混成である。一集としての首尾を其角の序と芭蕉の跋文で飾る。一集の内容には其角の俳諧的嗜好が色濃く出ている。

其角は俳諧者として二つの顔を持つ。芭蕉の高弟としての顔と世上の宗匠としての顔である。貞享から元禄へかけては、芭蕉の感化によって、佗びのふかいすぐれた句も詠み、蕉門の高足たる貫録を示しているが、其角本来の特色は、何といっても伊達好みの洒落しゃくろくな句にあり、かかる傾向はすでに『虚栗』において顕著に現われている。『虚栗』の大様は其角好みの集であると言える。

『虚栗』の風調は、中国の古典文学への傾斜が深まり、漢詩的表現を導入した句のスタイルに、貞門・談林に見られない独特の新風を示顕してきているものの、思想的にも情趣的にも、その内面観への浸透はいまだ微々たる状態を脱却していない。この集の連句の性格は『次韻』と本質的には何ら変わることなく、依然として「笑い」を中心とする多分に遊蕩趣味の俳諧である。新風と言い得るものは、いまだ素材や表現における外装的な面において、これを感じてできる程度を遠く出ない。但し、芭蕉の発句を別格として、蕉門諸家の発句には詩的内面化を遂げ、すでに蕉風を示顕しているものが散見するが、それらはまだ個々の現象として認められるに過ぎない。

わたくしは『虚栗』をウカレビトの俳諧と呼びたい。それに就いては掘り所がある。天和三年の蕉門の俳書にウカレビトの語が、わたくしの知る限りにおいて、二箇所に出ている。『虚栗』に「重陽三句句ヨト 菊」として、嵐朝・芭蕉・嵐雪の漢和発句とも称すべき異体の句が並べられ、その一句は、

俳門ウカレビト 有ウ芳カウ 菊ハシ 止ハ 嵐雪

とあり、「俳門ノウカレビト芳菊ノカウバシキタバコ有リ」と読む。いま一つの例は芭蕉・麁塙・一品の三吟歌仙「胡艸ゴソウ」（天和三年作）の名残裏の付合に、

俳諧のそらごとはなの浮狂人 晶
馬蹄ツツミに鼓ツツミおくるはるかぜ 蕉

とある。「浮狂人」は、『虚栗』の一例に徴しても、ウカレビトと読まれていることはまちがいない。前句は、俳諧の空言を吐く浮狂人という意であるが、五句定座の「はな」に掛合わせて、花に浮かれ歩く人と句作りしたもの。挙句は「俳諧のそらごと」とあるより「馬蹄に鼓」と趣向を立て、「はな」とあるに、春季を合わせて、「はるかぜ」と句作りしている。一句は、馬蹄の音を鼓の音と聞きなして春風に吹かれて行く、当意即妙に空言を吐いて見せた俳諧である。

『新撰俳諧辞典』（昭和二年刊）は、「うかれびと」に「蕩子」の漢字を当て、「花や月に浮かれ歩く人、歌人、俳人などをいふ。『俳門』と記

す。『広辞苑』（第二版）は、「うかれびと」の項目に、①定住の地を持たない人。浮浪人。靈異記下訓釈「浮浪、宇加礼比止」と記し、②花や月に浮かれ歩く人。風流人。③道楽者。遊蕩児。と、意の変遷を記すが、その典拠を挙げない。ウカレビトの歴史的な意は、律令制度の課役出挙の重圧から本籍地を離れて他土に逃れた浮浪の徒を言うのであるが、上掲の俳書に見えるウカレビトは、もとより斯る意から離れて、俳諧という滑稽風流に遊ぶ者を呼称した語である。

他門はもとより、蕉門の俳諧（連句）も、天和の頃はまだ多分に笑いの俳諧であり、遊蕩趣味の濃い俳諧である。嵐雪が俳諧者をウカレビトすなわち浮狂人と自認したとしても何の不思議もない。『虚栗』の俳諧を、その性格の上から見て、ウカレビトの俳諧と定義づけることに何の抵抗も感じられない。芭蕉の高足として其角と並ぶ嵐雪が、自らを俳門のウカレビトと称していることは、『虚栗』の俳諧的性格を考える上にまことに興味ぶかいものがある。

五

新風『虚栗』の唱える主張をまず其角の序に聞いてみよう。その全文を掲げる。

嚙^ツ古人貧交行之詩^ヲ吐^テ而戯^ス序

翻^{セバ}手作^リ雲覆^レ手雨

紛々^{タル}俳句何須^レ数

世不^レ見宗鑑^ガ貧時^ノ交^ハ

此道^ノ今人棄^テ如^レ土

困よ世に拾はれぬみなし栗

晋其角敬

其角の序は、杜甫の詩に擬して、朝暮に浮沈を反覆する無定見な世間の俳諧を警策して、頼むに値せずと断じ、わが徒の俳諧は、斯道の祖宗の生き方に通じる、清貧を甘なう隠逸の俳諧であることを高らかに自負したもの。

さらに一句を掲げて、『虚栗』は、その名のごとく世間一般の見地からは用いるところの無いもの、世間に逆った風雅であるとす。この其角の序には深川草庵に世間を侘びた芭蕉の感化の及んでいることを見逃してはなるまい。但し、其角が俳諧者としての生きざまについては既述せるごとくその二面相を心においてかからねばならない。

余説ながら其角の『雑談集』に、俳諧の始祖山崎宗鑑について次のごとく記す。

支那弥三郎入道宗鑑は、生涯をかるんじて隠逸高く、山崎の桑の門、しかも車馬の喧^{カマビスシキ}なし。ひと日近衛殿、宇治へ逍遙^{セウニョウ}の比、然る法師しれもの也、と尋ね入せ慕ひけるに、瘦^{ヤセツカレ}劣たる老法師ひとり、庭草取などして、そのほどの池のたゞへに、水かどみ見けるさまを「宗鑑がすがたをみよやかきつばた」と仰^{おほせ}下されたれば、則^{すなはち}「のまんとすれば夏の沢水」とつかうまつりける。当意興ありけるにや。

俳諧者其角の器量からすれば、守武・貞徳よりも宗鑑の活達ぶりが格別に賞でられたと推察される。

六

次に芭蕉の跋文を見ることにし、その全文を掲げる。

栗とよぶ一書其味四あり。

李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る。これに仍而其句を見るに遙にして聞に遠し。

佗と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也。

恋の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顔、黄金は鑄ニ小紫、上陽人の鬪の中には、衣桁に薦のかゝるまで也。下の品には眉ごもり親ぞひの娘、娶・姑のたけき争いをあつかふ。寺の児、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を仮名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。

其ノ如震動虚実をわかたず、宝の鼎に句を煉て、龍の泉に文字を治ふ。是必他のたからにあらず、汝が宝にして後の盗人ヲ待テ。

天和三癸亥年仲夏日

芭蕉庵桃青鼓舞書

跋文の最初の一節は『虚栗』には四つの味があるとする。すなわち文中の李杜・寒山・西行・白氏の詩味を指す。二節と三節は『虚栗』の俳

諧の中心的感味を説き、四節のすべてを恋の句についての記述に当てている。終節は『虚栗』の句の巧緻を極めた表現技術を讚美して結ぶ。

芭蕉は、まず『虚栗』の句は、李杜の詩心寒山の禅味に浸透したもので、世間月並の俳諧と異なり、まことに深遠な味わいを持つというのであるが、褒詞の過ぎるを思わざるを得ない。次に其角の序の句に対応して「佗びと風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也」と立言する。この一節は芭蕉の志向する風雅観の基本姿勢を述べたもので、『虚栗』の実態は（芭蕉の発句を除いて）そこに至るにはまだ距離のあることを思わせるが、芭蕉の理想とする方向へ一步を踏み出している点はひとまず認めてよいであろう。芭蕉の言う「佗び」は、俗世間の名利を離れ、清貧を甘なうことによつて、風雅のひと筋に生きる隠士の境涯に宿る「佗び」であつて、風雅はこの世間をうち佗びた境涯そのものの中に実存する。芭蕉は、延宝八（一六八〇）年、冬の深川入庵を契機として「佗びと風雅」の一元化を成し遂げ、かれ自身の発句はすでに蕉風を実現し得ている。その指針とした第一人者が他ならぬ西行であり、その歌集『山家集』である。

『虚栗』の俳諧が、中国の代表的な古典詩への関心を濃く表わしてきている点は注目に値するが、その作品への影響は、いまだ素材と表現体の上にとどまり、作品の本質的変革を見るところまでは至っていないのが実態である。但し、当時すでに芭蕉の発句は蕉風への内面化を実現しており、其角・嵐雪・杉風等の句にも蕉風の現われを看取できるのであるが、この集の大勢は連句はもとより発句も依然として談林的晦澁を出

ていない。総じて『虚栗』の風調の新しさはあくまで素材や表現の上に見る外装的なものであって、句心に及ぶ内面的なものではない。

芭蕉は、跋文の四節において「恋の情つくし得たり」と、恋の句についてことばを尽しており、二段、三段との釣衡の上から見て異様な感を抱かせる。『虚栗』の歌仙九巻のうち、嵐雪と其角の両吟歌仙「我や来ぬの巻」は発句から挙句まで恋の付けの連綿から成るといふ極めて特殊なものである。芭蕉が跋文に「恋の情つくし得たり」とするのはこの一巻がある故とまで言える。この一巻に『虚栗』の俳諧的性格が象徴的に現われているといふことができる。この巻のみならず、他の歌仙、また発句においても斬新な恋の句が詠まれており、それは偏に其角好みの編集に因ることであつて、芭蕉はそれをそのままに受けて記述しているわけである。跋文の中に芭蕉の挙げている付合つけあひの二つは中国の古典に取材した恋の句であるが、それについて概略の説明を加えておく。文中の「昔は西施が振り袖の顔、黄金こがね鑄こ小紫こむらさき」は、其角と芭蕉の両吟歌仙「詩あきんどの巻」の付合に「たゝかひやんで葛うらみなし 蕉」「嘲アザケりそ黄金は鑄こ小紫こむらさき」とあるを指す。小紫は当時名高い吉原の遊女で、その身受けには莫大な黄金を要した。この其角の付句は、鄭毅夫「若論ニ破ル吳功第一、黄金只合ニ鑄ル西施ヨ」からの着想。寛永十八年刊、徳元の『俳諧初学抄』の「恋の詞」に「西施 越王勾踐の後也。越王、吳王に戦まけてかうさんし侍る時に、范蠡此西施を吳国へおくり侍り。吳王又是にまよひて、会稽山の軍の時終に越王にうたれ侍りぬ。越王降参しける口を、雪をふくみてすゝぎ、二度会稽のはぢを雪と云り」とある。

「上陽人の聞の中には衣桁に蔦の掛かるまで也」とあるは、嵐雪と其角の両吟歌仙「我や来ぬの巻」の付合に「松虫またず任すまあれの宮 雪」「露は袖衣桁に蔦のかゝる迄 角」とあるを指す。この其角の付句は白楽天の諷諭詩「上陽白髮人」に拠る。この詩は、玄宗の寵を一身に集めた楊貴妃にねたまれて上陽宮に配せられ、空しく白髪の人となつた宮女の悲嘆を歌つたもの。その一節に「未ダ容サレ君王侍ル見ル面、已ニ被ル楊妃遙カニ側ニ目、妬ニ令ニ潜配ニ上陽宮、一生遂向空房宿」と記す。「衣桁に蔦のかゝるは、世話に碎いた俳諧で、其角の俳匠としての才氣のほどを伺わせる。

七

歌仙「花にうき世の巻」は芭蕉・一品・嵐雪・其角・嵐蘭の一座によつて成る。但し、初表六句目は執筆が付けている。次に初表の発句から四句目までを挙げる。

憂ウレ方知ニ酒聖ニ

貧シテハ始メテ覚ニ錢神ニ

花にうき世我酒白く食黒し

芭蕉

眠ニヲ尽ス陽炎ノ瘦

一品

鶴啼ナミて青鷺夏を隣トナらん

嵐雪

童子ツボ礫トを手折ツル唐梅

其角

詞書は、白氏文集、卷十七「江南謫居十韻」中の二句を借用したものの。

発句の意は、花にうかれる浮世であるが、自分は粗酒粗飯を甘なう境涯にあるというので、深川草庵の貧生活を詠んだ一吟。

脇句の「陽炎」は、春季の「かげろふ」を漢字で書き、「カゲボシ」と仮名をふって「影法師」の意を掛け合わせるといふ言語の遊びをしたもの。前句を世外に遊ぶ風流者と見立て、「花にうき世」とあるに「眠ヲ尽ス陽炎」と春暖の気を合わせ、「我酒白く食黒し」とあるに「カゲボシの瘦」と其人のさまを打添えた脇である。発句は其人の自の句であるが、脇句は其人を外から見た他の句として付けている。但し、この脇句、発句の見立が皮相であるために、付筋の乱脈な、ただ語呂を合わせただけの低俗な付句となっている。発句の真意を正しく捉えていないのである。一品は、ひととき信徳の門にいた関係から蕉門と交わるに至ったと考えられるが、芭蕉の立句に脇を付けるような器量を具えた作者ではなかった。

第三は、前句の「眠ヲ尽ス」というを草庵の隠者と見立て、「陽炎の瘦」とあるに「鶴啼て青鷺夏を隣る」は一句の作である。但し、「瘦」の語に続いて、「鶴」「青鷺」の趣向を立てたところ、古風の付け方であり、遊び気分の笑いの俳諧であることを思わせる。この付け、「夏を隣る」で春季。

四句目は、前句を鶴・青鷺の田野に降りいる体と見立て、童子が梅の実をもぎとって礫にすると付けた。礫は前句の鶴か青鷺に投げつけるた

めと見られる。前句に搦めた全くの意味付けである。漢詩的な生硬な表現に新風を見出しているのであるが、「礫を手折ル」という屈折した表現は晦渋な談林調を濃くとどめている。

八

嵐雪と其角の両吟歌仙「我や来ぬの巻」は、発句から挙句まで三十六句、すべてこれ恋の付けの連綿から成るといふ特殊な一巻である。次に名残の裏六句を掲げる。

若衆と私あかしのほとゝぎす 雪

つれなき枕蚊屋越ヲ切ル 角

紅の脚布哲姿むごかりし 雪

五十の内侍耻しらぬかも 同

花の宴に御密夫の聞えあり 角

やぶ入ル空の雨を懶 同

名残の裏四句目は、源氏物語「紅葉賀」に出てくる源内侍の面影を寄せた付け。前句に「哲姿むごかりし」とあるを咎めて、「五十の内侍」と趣向を定め、乱れる「紅の脚布」とあるに「耻しらぬかも」は一句の作である。源内侍の面影の付けであるが、前句の「紅の脚布」をここでは俳諧の虚と見た上での付けとしている。物語には「さすがに過し難く

て、裳の裾を引き驚かし給へれば、蝙蝠のえならず画きたるをさし隠して、見返りたるまみ、いたく見延べたれど、目皮はいたく黒み陥りて、いみじうはづれそゝけたり」と記す。源氏の君十九歳、内侍五十八歳のとこのことである。『俳諧初学抄』の「恋の詞」に「源内侍 きた過侍る女ながら、あだめきてけさうじたるなめり、歌よく詠て琴も上手めかし侍れば、いそぢになりける女に侍れど、光源氏も心まどひて契り給ひしとかや」と記す。文中「琴も上手めかし」とあるが、物語には琵琶を弾いては「殊にまさる人なき上手」とある。

五句目は、前句に「耻しらぬかも」とあるより「御密夫の聞え」と趣向を立て、「内侍」の位に「花の宴」は、ここに匂いの花を出した一句の作である。打越と前句の二句を一意と見て、「五十の内侍」の恋を噂にした付けと見られる。物語には、内侍の歌「立ちぬるゝ人しもあらしあづまやにうたてもかゝる雨そゝぎかな」に答えて、源氏の君の「人妻はあな煩はしあづまやのまやのあまりも馴れじとぞ思ふ」の返歌があり、それに続いて地の文となり、「とて、うち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくやと思ひかへして、人に随へば、すこしはやりかなる戯れ言など言ひかはして、これも、珍しき心地ぞし給ふ」と、契りを結ぶに至る。内侍には通ってくる男が他にあった。

源氏物語に登場する女性の群像の中で、「あはれ」と対蹠的な「をかし」の見本のごとくに描かれているのが源内侍にかかわる挿話である。この好色の老内侍を活躍させているところに『虚栗』の笑い中心の遊蕩的趣味が象徴的に現われていると言えよう。蕉風確立以後の俳諧におい

て、恋の座は一巻の見せ場であるゆえ、力を入れた句作りをしているが、この巻に見るとき「紅の脚布」「御密夫」といった露骨なことばは用いなくなり、恋の情趣だけを懐かしく言い取って、あとは言外の余情に任ずという、謂わゆる匂いの感合を基調とする品の良い付合に改められている。『三冊子』に「むかしの句は、恋の言葉を兼而集め置、その詞をつづけ、句となして、心のこひの誠を思はざる也。今おもふ所は、恋別而大せつの事也。なすにやすからず」（白）と記す。

九

安永・天明の俳諧中興期に際して、一途に『虚栗』の風調を推した俳諧者に加賀の堀麦水がある。安永三年刊『蕉門一夜口授』に、かれは支考の美濃派を評して、「一向に俗談卑理、損徳の街に落ツ」と断じ、蕉門七部の書も『続猿蓑』を外して、『虚栗』を入れるべきであるとした。かれの論は直観的なもので、「みなし栗は奇書なり。人をして活達ならしむ。巻中に気凱・高致の吟多し」と言い、「其角詩・商ノ吟、是より翁と両吟の歌儂聞がたきに似たりといへども、よく味へば手を打て感嘆するに至る」とした。

麦水の主張は、支考の徒の俗調を厳しく拒否した点において、中興期における俳諧の革新を刺激する歴史的意義を持った。が、その主張は偏狭に過ぎた為め革新そのものに結びつくまでには至らなかった。実際の革新は蕪村に見るとき豊かな広い視野に立つことを必要条件とした。

燕村は、「春泥句集序」の中で、「麦林支考其調賤しといへども、工みに人情世態を尽ス。さればまゝ支麦の句法に倣ふも、又工案の一節ならざるにあらず。詩家に李杜を尊ぶに論なし。猶元白をすてざるが如くせよ」と述べている。

麦水の『統猿蓑』否定論は支考に対する感情論の延長であつて、この集に対する正当な客観的評価とは言いがたい。支考の句が俗調に墮していくのは芭蕉没後の現象である。『統猿蓑』の俳諧（連句）に見る野趣をおびた俳味は俗に碎けて卑しからず、加うるにその洗練された付合の技法に至つては『虚栗』の到底及ぶところではない。『統猿蓑』に対する麦水流の感情論は現代においても跡を絶たない。

文化十二年刊、石谷の『芭蕉翁付合集評註』は、『虚栗』における其角の発句と芭蕉の脇句を取り上げて、評言を加えている。

酒債尋常往処有

人生七十古来稀

詩あきんど年を貪ル酒債哉

其角

冬湖日暮て駕馬籠

芭蕉

発句、詩商人といひ酒債といひ、詩人酒徒のありさまをのべたるをうけて、冬湖と音にて用ひ、馬にのする鯉と漢句のすがたにつくりて、発句の余情をあらはしたり。されどこれはみなし栗の俳諧として、又一体なり。翁いまだ正風を得ざる時の俳諧なれば常格としが

たし。

評者石谷は、闌更の門人であるが、『虚栗』を新風とは認めても、いまだ蕉風とは認めていないのであつて、正当な評価とすべきである。この点についてなお説明を添える。

其角の発句の前書は杜甫の七律「曲江」の三、四句である。杜甫に着目してきた点は新風胎動の誘因として評価できる。然し、其角における杜甫の援用は興味本意のものであつて、いまだ杜甫の詩にこもる真氣に気づいているとは言いがたい。其角の発句が興味本位のものであるゆえ、芭蕉の脇句もまた興味本位のものにとどまっている。『虚栗』所収の芭蕉の発句に「憶老杜」の前書をおいた「髭風ヲ吹て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ」という悲愁にして沈痛味をおびた吟がある。其角の発句をこの芭蕉の句と対照してみれば、両者の杜甫の詩に寄せる享受の仕方の異質な点が一入明らかになるであらう。

『虚栗』の俳諧（連句）に見る新風は生硬な漢詩的表現を用いた句のスタイルに寄りかかった外装的なものであつて、句心にあるものは談林的な穿ちや滑稽的趣味に停滞しており、いまだそこから幾ばくも離脱していないといふことができる。

十

蕉風の開発は、芭蕉単独の発句が先行し、他者との同調を条件とする連句はこれに遅れるという経過をたどった。それらのことは、『虚栗』

における新旧の人的構成と作品に対する価値観のグレードを考えてみれば、大体推察できるところであろう。蕉門においても、芭蕉の抱いていた価値観に比べて、其角・嵐雪等のそれはなお低い次元にとどまっていた。要するに芭蕉を中心に蕉風の連句が興行されるといふ客観的条件はまだ整っていなかったのである。

次に、当時における芭蕉と蕉門諸家の注目すべき発句を挙げる。

延宝九年刊、言水編『東日記』

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮 桃青

いづく霽傘を手にさげて帰る僧 全

藻にすだく白魚やとらば消えぬべき 全

天和二年刊、千春編『武蔵曲』

茅舎感

芭蕉野分して盃に雨を聞夜哉 芭蕉

深川冬夜感

櫓の声波ヲうつて腸氷ル夜やなみだ 全

夕顔の白ク夜ルの後架に昏燭とりて 全

天和三年刊、其角編『虚栗』

憶老杜

髭風ヲ吹て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ 芭蕉

手づから雨のわび笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどり哉 全

茅舎買水

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり 全

和三角蓼螢句

あさがほに我は食くふおとこ哉 全

傘にねぐらかさうやぬれ燕 其角

三陽

醴に桃裏の詩人髭白し 全

汐干くれて蟹が裾引なごり哉 嵐雪

はぜつるや水村山郭酒旗風 全

荷興

浮葉卷葉此蓮風情過たらん 素堂

芭蕉の発句は、延宝八年冬の深川移居を境にして蕉風への自覚を顕現しているが、其角・嵐雪・素堂等の句にも純度の高い詩的価値のある作品が現われてきている。然し、芭蕉の句が生活実感に根ざした人生的な味わいを持つて対して、其角・嵐雪・素堂の句は漢詩趣の発句化ともいふべき趣味的な味わいのものである。芭蕉を迎えて『冬の日』を実現した尾張の俳諧者に強い影響感化を与えたのは上に見るごとき芭蕉の発句であった。時代は移り中興俳諧の蕪村が『虚栗』から摂取したものは、芭蕉の発句からというよりも其角・嵐雪・素堂の漢詩的な美を基調とする趣味的な発句からであった。